

震災教訓の共有むすび塾@インドネシア（河北新報社と共催）

掲載日:2013年04月25日

(C)河北新報社



津波に襲われた当時の様子や、生徒の心のケアについて語る国立第11中学校の教職員—24日午後5時すぎ、バンダアチェ市(写真部・佐々木浩明撮影)

むすび塾@インドネシア・バンダアチェ

防災意識醸成訴え

【バンダアチェ(インドネシア) 高橋鉄男(報道部) 防災ワ
ークショップ「むすび塾」の一行は24日、バンダアチェ市にあ
る国立第11中学校を訪れた。JICAと市が共催した教育関係
者との懇談会に参加。心のケアや防災教育について教諭らと
意見を交わした。

同校は2004年のスマ
トラ沖地震の巨大津波で全
壊した。当日は日曜日で、
生徒は居宅にいるが、市主
催の運動会に参加するがし
ていて、約500人のうち
47人が犠牲になった。

日本の支援で07年に完成
した新舎舎で、むすび塾の
「語り部」らは教師や地区
スタッフら8人と意見を交
わした。

被災後の心のケアについ
て、校長のリスヤニさん
(56)は「踊りや津波の歌の
歌詞募集、絵描きなどのコ
ンテストを毎月実施し、競
争心を育むことで前向きな
気持ちになるようにしてい
る」と紹介した。

防災教育は、地元大学の
津波研究機関が担い、避難
訓練や災害の授業を毎月実

教育関係者と座談会 子どもケア・訓練 課題共有

施している。外部に委ねる
ことで教員の防災意識が育
つていない側面もあり、登
下校などを想定した避難
訓練はしていない。

被災・復興支援機構(東
京)の木村拓郎理事長ら
は一登下校や放課後など
さまざまな状況を想定し
て訓練してほしいと訴え
た。

東日本大震災で児童・教
職員84人が死亡、行方不明
になった行善市六小につ
いて質問が寄せられ、イン
ドネシアの教育関係者の間
でも関心が高いことがう
かがわれた。

イスラム教の信仰心が強
い市民は災害を「神様のお
ぼしめし」と受容する傾向
もある。「折りながら避難
に努力すること」を教
える。教諭のマザーさん
(61)は同僚とともに約束
した。

子ども遊びの中で防災
を意識する方法として、
木村理事長は、縄跳びの活
用を提案。津波避難を呼び
掛ける歌を作り、歌いなが
ら縄跳びをする遊び方を
紹介した。

一行が模範演技をして見
せると評判は上々だった。
リスヤニ校長は「いいアイ
デア。ぜひ取り組んでまた
い」と笑顔で語った。



(1面に関連記事)